

◆ 講演「現代のラテンアメリカ」第2部

タンゴとともに半世紀

阿 保 郁 夫

司会：第二部は、「歌う身体」と題し、日本のタンゴ界を50年に渡り牽引してこられた歌手の阿保郁夫さんをお招きいたしました。ひょっとしたら阿保郁夫さんとするより、Ikuo Aboと御紹介する方が適切かもしれません。

青森県弘前市ご出身の阿保さんは1961年にタンゴ歌手としてデビューされました。ほぼ50年前、ちょうどこの研究所が発足した頃にデビューなさっているわけですが、現在のように何でもクリック1つでわかる時代ではなかったので、当時のタンゴはラテンアメリカへの数少ない窓だったと思われます。残念ながら、藤沢嵐子さんは先日他界されました。ここにお写真を飾っております。阿保さんからは大変貴重な、アルゼンチン現地で録音された音源や、デビュー当時のお写真なども提供いただきました。



今日はラジオのDJ風に曲を挟みながら少しずつお話を伺う形で進めますので、都合上、司会もお隣に同席いたします。

(拍手)

阿保：(2001年のこと) 血圧が248で、「あ、これはダメだ。」という医者言葉を聞いた後、脳梗塞の治療を続けたのですが、4ヵ月後、退院する時に、妻は医者から「奥さん、生きていて良かったじゃない」と言われました。血圧248になった人はほとんど亡くなるそうですが、私は助かりました。かみさんは「99%、失語症になります」と言われたそうです。「先生がそう言っていたから」と、妻は僕に説明するんですけど、僕はそのときは、ただ「おう、おう、おう」と言っていただけでした。僕は失語症になるんだと思っていました。

でも、「タンゴを歌っていて良かった」と思います。スペイン語を話す、それが言葉を取り戻すきっかけになりました。スペイン語は、舌先をほんのちょっと動かすだけで大概のことは話

せませす。舌根をあまり使わないでも発音できます。日本語はそうはいきません。脳梗塞をやっ
て舌根が硬くなってしまうと、もう言葉が何一つ発音できなくなります。今でも、タ行音とか、
例えば、さ・さ・きさんとか、人の名前は、今この速さで発音してやっと言えるくらいです。
友人に、さ・さ・だというのがいるのですが、私が電話をかけて「さ・さ・ださん？」と呼び
かけると、電話を取った奥さんが「うちは笹田ですけれど」ときちん「ササダ」と発音して
応えます。脳梗塞から十何年たった今でもこんな感じで、日本語のほうがよっぽど難しいです。

司会：ということで、もう核心に入るようなお話をいただきましたが、実は1990年にお招き
した折に来場された八柳さんという方が、出身校のホームページで紹介して下さっていました
ので、ちょっと引用させていただきます。(八柳修之「最後の杯(1)」2002/12/09付)

阿保さんと初めて出会ったのは1990年11月、立教のラテンアメリカ講座の特別講座であっ
た。当時、私は二度目のアルゼンチン駐在から帰国したばかりで、タンゴ熱まだ覚めやら
なかったので自然に足が向いた。(中略)

「私(阿保)はあの朝、あのいまわしい病気に罹らなければ、タンゴを歌うことはなかつ
たでしょう。そして大学を出て平凡なサラリーマンになるか、青森で百姓をしていたでし
ょう。1958年3月のある朝、洗面所の鏡に写った自分の顔右半分は大きくひきつっていた。
東大病院で診てもらうと、三叉神経が切れており、顔面マヒという診断であった。20歳の
私には、これからの人生への絶望感が募るばかり、頭の中は真っ白になった。次の日から、
治りたい一心で病院へ通った。しかし、治療といえ、カルシウムとアリナミンの注射、マッ
サージの繰り返しばかりで症状は一向に良くならなかった。発病から5か月、顔は一層ゆ
がみを増したように見え、下宿の学生達との食事を避けるようになり、今思えば私の心も
蝕んでいた。

8月、病院の帰り突然雨に襲われた。雨宿りのため池袋の赤札堂地下の喫茶店に入った。
タンゴのレコードがかかっていた。置いてあった音楽雑誌をべらべらめくると、『フラン
シア・タンゴ教室』という広告が目についた。これがきっかけで、フランシア先生の教室
に通ってみようかという気になった。」

「先生は顔面マヒの私を温かく受け入れてくれた。明けても暮れても『ノスタルヒアス』
だけのレッスンであった。私は不満であったが、先生は『この曲がきちんと歌えれば、ほ
かのどんな曲でも歌えるようになるから』といい、私もその言葉を信じた。そのうち唇も
スムーズに動くようになり、ひねくれた私にも明るさが戻った。様子を見に弘前からやっ
て来た父は『やるからには、途中でやめるな』という言葉を残して帰った。

その後、立命館に復したがサラリーマンにならずタンゴの道を進むことに決めた。そし
て1961年、NHK「歌の広場」で歌手としてデビューし、64年からオルケスタ・ティピカ・
東京、藤沢嵐子の南米公演に参加し、アルゼンチンで本格的にタンゴを勉強したのです。」

司会：これが90年にいらして下さったときのお話の一部として記録に残っております。それではまさしくデビュー当初、フランシア先生とテル先生、恩師お二人の手になる曲を5曲続けてお聞きください。

1. La última copa (Juan Caruso –Francisco Canaro) Acompañamiento: Fernando Tell Trío
2. El japonés (Santiago Adamini—Arturo Galucci)
3. Secreto (Enrique Santos Discépolo)
4. Mi dolor (Manuel Meaños—Carlos Marcucci)
5. Sukiyaki (Felix Villa—Hachidai Nakamura)

(拍手)

司会：Sukiyakiは本当に素晴らしいですね。何しろ、長崎とSukiyakiがみごと韻を踏んでおり、中村八大、永六輔さんには申し訳ないですが、先に日本語の詞がついていたとはとても思えません。では、恩師にあたるフェルナンド・テルさんについて少しお話しください。

阿保：テル先生が伴奏していた1曲目の*La última copa*「最後のサカヅキ」は録音の予定には全然入っていなかったんです。12曲録音するという契約を結んで、当時のソノシート制作会社コダマプレスで10曲目まで録音が終わったときに、「1曲だけ我儘をさせてくれ」、と先生は私にこれを歌わせたんです。

皆さんはこれを聞いてどう思われたか。テル先生は帰国の際に、横浜港で私に次の言葉を残しました。Mi amigo Ricardo Francia me decía siempre “Sentías el tango profundamente. Lo comprobé en esta grabación que colaboramos ambos”. 私はまだスペイン語はそんなにわからなかったもので、その時には意味がわかりませんでした。お金がなかったのでスペイン語は独習するしかなく、やっとわかって自分なりに訳してみました。わが友フランシアはいつも私に語っていた。「君はいつも心にタンゴを深く感じている。そのことを、双方が協力したこの録音で私は確かめることができた。」(涙ぐむ)

今でも思い出します。「タンゴは譜面を歌うんじゃない。歌には詞ことばがついているだろう。タンゴにはスペイン語の歌詞がついているだろう？ タンゴはスペイン語を自分の国のことばとしてしゃべる人の前で歌って初めて真価を問われるんだ。たとえどんなにきれいなメロディでも、そのメロディに流されて歌うな。詞ことばを歌って、『こういうものを私は今表現しました』、アルゼンチンに行っても、スペイン語圏に行っても、堂々とそうやって歌ってみろ。それが日本生まれのタンゴ歌手がやるべきことだ。」そのように、いつも語っていました。この言葉をやると訳せるようになって、それを見た時に、津軽の農家百姓の俸に、英語だってろくにできなかった者に、スペイン語の発音をフランシアさんが教え、テルさんも教えた。ただ発音で歌を歌うだけでなく、「心を込めて歌え、心だけが聞き手の心に伝わるから。」と言って。今は私は1曲も歌えませんが、64歳までスペイン語の歌で通しました。その最後の瞬間まで、歌うときはいつも、私の心を聞いてくれと思って歌っていました。この*La última copa*そして、テルさんの残したこの言葉がなによりも大きい教訓です。

司会：ありがとうございます。今日は「スキヤキ」の貴重な譜面などもお持ちになっていま

すので、これにまつわることを。

阿保：早川真平さん、嵐子さんとオルケスタ・ティピカ・東京が1964年初めて南米公演に行かれるちょっと前、僕は楽器運びのための、菅原洋一さんと国井敏成さんという専属の男性歌手がおりましたけれど、そのさらに下で、楽器運びをしながら、嵐子さんの歌を聴いて勉強しろと言われて入ったんです。それから何ヶ月かして早川さんに呼ばれて、「南米旅行を考えている。やっと夢を実現するのでベストメンバーを考えた。嵐子は行くのは当たり前だけれど、君を連れて行く」と言われました。びっくりしました。

「菅原さんは、国井さんは？」

「連れて行かん。」

「どうして僕なんでしょう。そんなに曲も知っているわけではないし、ご期待に添えないと思います」と言っても、

「もう自分の腹は決まっているから」と早川さんに言われました。

ちょうど「上を向いて歩こう」が流行っていたので、「上を向いて歩こう」を覚えておけと言われ、一所懸命、日本語の歌詞で覚ええました。そうしたらアルゼンチンに着いたその日のうちに譜面をぼんと渡されて、「ここに書いてあるスペイン語の歌詞を一週間で覚えろ。歌もタンゴのように歌え。アレンジはもうできている。」

日本でもう用意していたんでしょうね。平吉毅州^{ひらよしたけくに}という、尾高賞を取った偉い友人のアレンジです。桐朋学園大学の教授をした後、沖縄県立芸術大学の音楽学部で教え、病を得てこの世を去りました。*Sukiyaki*のタンゴのバックに流れる音、すごい才能があったと思いませんか。「上を向いて歩こう」からなんのヒントももらっていませんよ。すべて自分で考えた、ああいうアレンジができる人だったんです。芸大の作曲科出身です。そういうことにも恵まれて、私は、アルゼンチンでデビューしたときから、まあ幸いの多い道を歩み始めました。私には嬉しいことでした。私には、今この曲を聞いて、再びテルさんの*La última copa*の演奏を聴いて、デビュー時に感じたことよりも、今、76歳の老人となって聞いて、76歳の老人が涙を流して感じ入っています。もっと深く…。

司会：司会が余計な口を挟むまでもありません。では、次の5曲を続けてどうぞ。

6. La cumparsita (Enrique Maroni y Pascual Contursi—Geraldo H. Matos Rodríguez)
7. El día que me quieras (Alfredo Le Pera—Carlos Gardel)
8. Salud, dinero y amor (Rodolfo Sciammarella)
9. Che, bandoneón (Homero Manzi—Aníbal Toroilo)
10. Mama vieja (Lito Bayardo—Juan Larenza)

司会：ご自分でご自分の歌に、とても感激なさっているご様子が隣にいてひしひしと伝わってきます。60年代の若々しい声も素晴らしいんですが、今の5曲は70～80年代にかけての録音でお声に一段と深みを感じられます。長く歌っていらして、ご自分の声の変わり具合とか、いつ頃の声が好きだったとか、ご本人からみた違いや感慨というのは如何ですか。

阿保：今、振り返ってみれば、やはり最初の5曲を歌った時の声、自分にあの声が備わっていたんだと思えたことが自分には一番大きい喜びでした。そこから先は内容がだんだん難しくなってくるんで、たとえば*La cumparsita*。自分で経験していないことも歌うんですから、それにどう心を込めようかと思った。恋愛も経験していない、何も経験していない、それにどう心を込めようか。そこで芝居の役者の気持ちになれと思った。経験していないことを、さも経験したことのように、相手にはそう解釈してもらえるように歌う。それがさっきも言ったように、テルさんの教えです。詞を読んで、この作詞家はこういうことを聞き手にこう伝えろとこの詞を書いたんだ。百人歌い手がいたら、百色の歌があっても良いんだ。「あの人には僕はかなわない」と、自分で先に思うな。自分のベストを尽くして歌えば、全員には伝わらなくとも一人か二人にはドーンと来ているはずだ、そういう歌を歌いなさい。そう言ったテルさんの言葉がやはり本当だと思うんですね。

30代の頃、歌の難しさ負けそうになりました。けれども、難しさを感じながらもそこで終わるわけにいかない。「始めたからには途中でやめるな」という父の言葉がありました。私には何よりも重い、父の命令でした。途中でやめて田舎に帰るなということなんですね。それからいろんな仕事にかこつけてはアルゼンチンに何度渡ったかわかりません。自分で数えて一番頻繁だった頃、43回目のときに、かみさんから子供たちからも言われました。「アルゼンチンに行くのはもうやめてくれ。授業参観日にもパパはいない。一番いてもらいたい時に家にいない。」一年に3回も、それも1回ごと3ヶ月という行き方をしていたこともあります。レコードを作りに行っていた頃のことです。所属していた音楽事務所の社長が僕を信じてくれて、「会社が仕事を取ってくるからな。ビクターから3枚注文が来た。ポリドールから3枚来た。」と言われて、数を告げられれば、それを向こうが待っている期日の日までにはベストのものを作って渡さなければいけないということでした。

歌い手風情がレコードを作れるのかという声は日本ではずいぶん聞こえました。ところがアルゼンチンで一番有名なイオンスタジオのスタッフたちは「この国で、歌い手で、おまえのような質の高いレコードを作れるやつは一人もいない」。私は、私の歌を吹き込むのではなくて、私が狙っていったアーティストのベストのものを作ろうとがんばりました。アーティストたちは私より年上の人が多かったですけれど、本当に皆さん私の言葉に耳を傾けて、言うことに応えてベストを尽くしてくれました。運の良い男だと思います。

司会：ありがとうございます。次は4曲続けます。有名な*A lo Megata*に合わせて目賀田男爵の踊る写真も御覧下さい。

11. Qué tango hay que cantar (Cacho Castaña—Rubén Juárez)
12. Mi noche triste (Pascual Contursi—Samuel Castriota)
13. A lo Megata (Luis Alposta—Edmundo Rivero)
14. El motivo (Pascual Contursi—Juan Carlos Cobián)

司会：あっという間に残り3曲になってしまいました。次は*Viento*という曲ですが、これは

NHKのドラマの主題歌としてお歌いになったということですので、その辺のところを少しお話しください。

阿保：山田風太郎さんの「からくり事件帖」というドラマが放映されました（2001年）。NHKからアコーディオン奏者のCOBAさんに主題歌の作曲依頼がなされたそうです。COBAさんはCOBAさんなりに「大変だなあ」と思いながら、明治か、それ以前の時代を扱うドラマだからどういう曲にしたら良いかと考えていたそうです。その後NHKの番組プロデューサーからうちに電話がありまして、COBAさんから歌い手をしぼっていったら「60歳過ぎたタンゴの歌い手に決まりそうです」という電話があったそうです。何と僕を強く推薦したのが、今タンゴ界で一番活躍している小松亮太さんでした。

「阿保さん、今日、COBAさんがスタジオ録音中だから、タンゴ教室の帰りにスタジオに寄ってください」と言われて、初めてCOBAさんと会いました。COBAさんは初めはもっと若い人を想像していたそうで、声の感じは60過ぎに聞こえたのが、本当に60歳過ぎのおじさんが現れた。本当に60過ぎとは想像しないで作曲していたので、相当高い音域まで考えて書いた。それから、御本人もイタリア語が歌えるので、この速さなら自分はなんとかイタリア語では歌える。60歳過ぎた声に聞こえる人が長年歌ってきた人なら、もうちょっと高くても、もうちょっとテンポが速くても歌えるんじゃないかということを書いた。それがタイトルバックに流れた歌なんです。ちなみに私はこの曲を録音中に脳梗塞を発症しました。64歳のときでした。

録音の最中に脳梗塞が「ああ来た」と気づいたのは、私はそれまで声ひっくり返ったとか、そういう経験は一度もない。なのに64歳の私が録音中に、「おかしいな、おかしいな、どうしたんだろう」と思ったんです。タイトル曲を録音しているときには、本当にピークに達していて、これまで一度も吐かなかった弱音を吐いて、NHKのプロデューサーに「このへんで勘弁してください」と言いました。「どうした。どうした。」と駆け寄ってきて、そこに僕が倒れたもんですから、相当びっくりしたようでしたね。だけど結局深夜の2時過ぎまで録音していた。自分でもまさか脳梗塞とは思っていなかったもんですから、「まあ、軽く1杯」と打ち上げの1杯だけビールを飲んでお別れしてタクシーで帰ったんですが、家に帰ったときには呂律が回らなくて、家内が「あなた、どれだけ飲んで来たの？」と言うくらい。で、ちょっと寝ただけけれど、朝7時過ぎには目が覚めて、起き上がろうとすると、またごろんと、膝がガクガクして転んでしまうんですね。当時、ちょっと長髪にしていたものですから、「病院に行かなくちゃ」という気持ちと、「髪をなんとかしなくちゃ」という気持ちの両方が働きまして、床屋にという気持ちがまず先に働いて、床屋に行ったら、僕のしゃべり方を聞いた床屋さんが、自分の父も脳梗塞をやって、同じようなしゃべり方をしたから、「病気じゃないですか、脳梗塞じゃないですか」と言いながら髪を切っていたんですよ。それからタクシーを飛ばして、府中の病院に行きましたら、もう受付の看護婦さんが「あなたはいいの、いいの」と言って「車椅子」と大きな声で叫び、「自分で歩こうと思ってはいけない」と車椅子で連れて行かれて、朝早いですから、若いお医者さんしかいないんですね。電話して部長先生が来て、初めにも触れましたけれど、「血圧248というのは確認したか」、他の若い医師たちにもそれぞれ確認して、看護婦長を呼んで、「あんたも確

認したか?」「はい、しました。」部長先生でも、うっかりもらすんですね。「これはダメだな。」僕のことを言っているんだな、死ぬんだなと思いました。その神経内科の部長先生は僕が退院する時、玄関まで送って来て、すぐ家でも車椅子を買うように、「伝い歩きでもなんでも、今から歩くことをすぐに始めなければダメだ、今から慣らさないことには病気の方が余計進んでしまうから」「歩く稽古だけはしてくださいよ」と言われました。

雨の日には雨を友に、雪の日にも雪が友と思って、それで濡れるかもしれない、寒いかもしれないけれど、往き30分、30分休憩しても良いけど、また30分かけて帰るくらいの距離を午前と午後2回必ず歩くこと、それを正直に守ってやりました。そうしたら杖を使わずに歩けるようになりました。

僕の父は68歳、祖父は69歳で死にました。僕は今76歳です。年が明けて4月になると僕は77になります。うちの母は95歳で要介護5です。母より先に逝く訳にはいきません。祖母は95歳で亡くなっています。まあ、せいぜいがんばって、脳梗塞の後遺症を全部抱えて生きようと思っています。タンゴを歌う器官だけは死んでしまいました。歌うことはできませんが、脳梗塞を病む前からカルチャー教室でタンゴを教えていたんですが、今も詞を読むこととスペイン語の発音を教えています。そしたら、生徒の一人が、横須賀とか横浜から通ってきている人が、「どこにもいないですよ、阿保さんのような先生は。発音をここまで教えてくれる先生はどこにもいませんよ、スペイン語専門学科のある大学でも発音を教える先生はいないそうですよ。」生徒の一人にそういわれた。自分はまだ、それでもタンゴと関わってられる、スペイン語の発音を教えられる。私は脳梗塞をやったときに口の半分が閉じませんでした。今やっと閉じるんです。阿保という自分の名字を「アボ」と発音できなかったんです「アヴォ」とあいまいな音で言っていました。聞きなおされるともっと困りますから。例えば、「ブエノスアイレス」を発音できなかった。今は「ボ」が言えるようになりました。人間、努力ですね。まあ死ぬまで、あと4年か5年、生きたいと思っているんですけど、その間、本当に生きていたことができれば、まだまだタンゴに関係することで、関わっていきたくと思っています。歌って、「本当はこう歌うんだ」なんてことは、よくよくでないと教えられないんですけど、スペイン語をスペイン語らしく聞こえるように、詞の朗読をよくさせます。

司会：不死身のタンゴ歌手、阿保郁夫。それでは、まずいわくつきの2001年の*Viento*「風のタンゴ」を、次に復活後2011年の録音をかけます。最後*La última copa*の新しい録音で、伴奏メンバーの一新された同じ曲をお聞きください。

15. *Viento* (Hideto Nishimura e Ikuo Abo-Coba)
16. *Nocturno a mi barrio* (Aníbal Troilo)
17. *La última copa* (Juan Caruso—Francisco Canaro)

司会：阿保郁夫さん、今日は本当にありがとうございました。皆さんもう胸がいっぱいと思われそうですので、質疑は省きます。どうも皆さん長時間ありがとうございました。

〈聴衆の感想〉

編集部より：本講座修了生（2013）で早稲田大学在学中よりタンゴに傾倒、2005年にLos pollitosを結成した鎌田剛氏が、本講演の感想を自身のブログに発表された（2013年12月8日）。氏の許可を得てその一部を転載する。

言葉で書くのは本当に難しいが、阿保さんは、それほど自由のきかなくなってきた口を最大限に使いながら、ときには、ご自身でマイクを取りながら、ときには感極まって言葉を詰まらせながら、本当に熱く語ってくれた。その熱さは、本当にこちらの心にグッと来た。伝えたいことがたくさんある。でも、うまく身体が動かない。阿保さんはそう言っているようにも見えた。でも、ちゃんとその気持ちは届いています。僕も、アマチュアながら、学生時代のOBOGを中心に結成したアルゼンチンタンゴのバンドLos pollitosをやっており、本当に「タンゴ的なもの」とは何なのか？ どうしたら、日本人でも、アルヘンティーナのような音が出せるのか？ いい演奏とは何なのか？ ということ、普段から考えているのだが、少なくとも、僕は本当に今日のお話には感じ入ることが多かった。阿保さんが持っているその熱さ、タンゴに対する思い、表現に対する真摯な態度、そして、音楽とは決して上手下手だけじゃない。伝わるものがあるかどうかは結局心だ、という真理。すべてしっかりと受け止めました。

本当に今は阿保さんに対して改めて敬意を表すると同時に、この阿保さんの気持ちやこれまでの偉業をきちんと受け継がなくてはいけないという気持ちになっている。大げさかもしれないが、本当にそう思った。日本人だとか、アマチュアだとかプロだとか、そういうことは関係ない。現地の人「人生」とまで呼んではばからないタンゴという音楽を、心で受け止め、現地の人とできる限り同じ感覚で、演奏も歌も、心の底からわき上がるような情熱で行う。もちろん、そのためには普段からの鍛錬、努力は欠いてはならない。そういう意味では、単なる講演会ではない、その辺のライブよりもよっぽど感じ入る部分の大きい体験の場となった。本当にありがとうございます。

僕も父が脳梗塞を患っているのです、その大変さは身に染みてわかる。そんな大変な状態でありながら、今回のラテンアメリカ研究所の講演会を引き受けてくださったということに、本当に感謝したい。

〈参考〉

- ・ 阿保郁夫「はじめてタンゴを聴くまえに」『立教大学ラテンアメリカ研究所報』No.19 1991 pp.1-7
- ・ 八柳修之「最後の杯（1）」e-たわごと」岩手大学教育大学附属小学校・中学校クラスメートホームページ e-たわごと欄2002年12月9日寄稿（2013年11月20日閲覧）
http://fuzoku.cneti.ne.jp/e_010.htm

（あぼ いくお タンゴ歌手）

El Instituto de Estudios Latinoamericanos agradece al Sr. Daniel Machado, fotógrafo uruguayo residente en Japón, su colaboración desinteresada al llevar a cabo la charla del Sr. Ikuo Abo.

阿保郁夫氏の講演を実現させるに当たり、ウルグアイ出身の写真家ダニエル・マチャード氏より寛大なる御協力を賜りました。記して感謝申し上げます。